

朝日新聞
特別報道部

検証！福島原発事故の真実

プロメテウスの罠

プロメテウスの罠

検証！福島原発事故の真実



9784054053854



1920095012384

ISBN978-4-05-405385-4

C0095 ¥1238E

1340538500

定価：[本体1,238円]

※税が別に加算されます。

2

朝日新聞
特別報道部
|| 著

2

Gakken

Gakken

甲B第22号証
16
甲B第22号証

76キロ沖と47キロ沖の2点で観測されていました。2点とも5メートルなら沿岸に大津波が来るのは確実、と研究者は話しています。

「私にはそれは分かりません」

——3メートルの津波、と思つて逃げなかった人たちがいます。

「申し訳ないと思います」

——マニュアルに従つていた？

「そうです。結果が間違つていたとしたらマニュアルが間違つていたということです」

気象庁の検証文書には、以下の反省点が列記されている。

「水圧計を生かせなかった」「当初のマグニチュードが低すぎたことに気づかなかった」「警報切り上げにも時間を要した」

今年3月9日には警報に水圧計を生かすよう改めた。水圧計が1・5メートル以上を観測すれば、すぐに「10メートル以上」の警報を出すように。

横山の後任の永井章（56）は言う。

「警報が3メートルと低かったために少なからぬ人が避難しなかったのは事実です。もっといい方法があつたのではないかと悩んでいる職員もいます。マニュアルを改善します」

これに対し、環境防災総合政策研究機構の岡田弘は厳しい。

「マニュアル通りなら民間に任せればすむ。マニュアルに頼らず判断できる専門家が気象庁に

いないことこそ問題なのです」

原発避難指示によつて阻まれた 住民の救出

「まだ生きてる人が」

昨年3月11日、午後8時過ぎだった。福島県浪江町消防団の鈴木大介や荒川勝巳らが命がけの救助活動をしたあと、同じ団の高野仁久（50）は、懐中電灯をつけて津波の被災地を見まわつていた。

国道に近い川の土手。いつもなら国道を通るトラックの音がうるさいが、その音がない。波が打ちつける音もするはずだ。それも無い。真つ暗な静寂。不気味だった。

懐中電灯の光の輪の中に、流れてきた木片の山やビニールハウスが浮かんでくる。

高野は浪江町消防団のナンバー3、訓練分団長を務めている。津波の現場は二次災害の危険があるため、立ち入るなと言われていた。

もう生きている人はいないかもしれないと思ひながら、それでも現場を見ておきたかった。

軽トラックで屯所3カ所を激励してまわったあと、立ち入り禁止のゲートをくぐって現場に入っていた。

遠くに赤色灯が見えた。双葉地方消防本部のタンク車だった。消防隊が救助活動をしているのなら、この辺りにも救助を待っている人がいるかもしれない。

「誰かいるかあーっ！」

腹に力を込めて叫んだ。静寂の中、声は遠くまで響いた。

耳をすませる。

ウーともアーともつかない、か細いうめき声が聞こえた。

「誰かいるのかー」

再びうめき声。

どこから聞こえてくるのか分からない。一帯ががれきで、真っ暗だ。50メートル先なのか、100メートルなのかも分からなかった。

懐中電灯で辺りを照らしたが、津波で流されたクレーン車や乗用車、プレハブなどが見えるだけだ。

「どこだーっ！」

トンと音がした。

「どこだー！」

今度はトントン、と2回。

どこかに、誰かがいる。右手を伸ばして懐中電灯で遠くまで照らしても、5メートルほど先のがれきが見えるだけだ。一人ではどうしようもない。

「助けにくっから、待ってる！」

急いで軽トラックに乗り込み土手を引き返した。町災害対策本部がある役場まで5分。団長に報告した。

「まだ生きてる人がいる」

搜索できぬまま避難

団長は高野の報告を町災害対策本部に上げた。

町役場は津波から避難してきた人であふれていた。

判断の結果は、明朝を待っての搜索だった。水が引かない暗闇の中で救助作業をしては、二次災害のおそれがある。翌12日の朝7時、消防団が救助に向かうことに決めた。

そのころ、「双葉町の山の上にある諏訪神社で浪江と双葉の人が50人ほど取り残されている」という情報が入っていた。

高野は救出隊に加わった。自衛隊と消防署員、消防団員、役場職員で助けに向かった。

津波で海側からは入れず、山側からまわる。神社は石段が流され、人々は境内でたき火をし

て暖をとっていた。高齢者や母子が寒さに震えている。高齢者の手を引いたり、おぶったりして、三度ほどビストン輸送した。役所に帰ってきたのは午前3時30分になっていた。

3時間半後には救助活動を控えている。

消防団の幹部5人は役場1階で「休むべ」と声をかけあった。が、休む者は誰もいなかった。午前5時、突然役場が騒がしくなった。

「原発がおかしいらしい」

テレビで原発から10キロ圏内の避難指示が流れた。午前6時すぎから町災害対策本部の会議が開かれた。

浪江町役場は原発から8キロの場所にある。災対本部長である馬場有町長が、消防団は搜索をやめて町民の避難誘導をするという決定をした。

高野はショックを受けた。

双眼鏡を手に、4階建て庁舎の屋上に上った。

この日の日の出は午前5時53分。

湖のようになった沿岸地区を、朝日がまばゆく照らしていた。

あそこだ。あそこを聞いた人がいるはずだ。

人の姿が見えないか、目をこらす。車で行けばわずか5分の地点。直線距離で2キロ。太陽の光が水に反射して識別できなかった。まるで水を張った田んぼのようだ。

「人が、いるんだろうな」

思わず口にした。

今助けにいかないと。見殺しだ、という思いがよぎった。

でも原発がいつ爆発するか分からない。自分たちだって、住民の避難が終わらないと避難できない。

これで自分たちも終わりなんだろうな、と思った。

「すまん」泣いた

高野は気持ちを切り替えた。原発が爆発するかもしれない。1秒でも早く住民を逃がそうと決めた。

着の身着のまま避難して震えている人たちにカイロを渡す。おにぎりやパンを「持ってけ」と配る。避難先は、原発から約12キロ離れた菊野小学校。そこに向かうバスを用意し、住民をバスに誘導した。

避難者の食べ物を確保するため、高野たち消防団員は大釜とガスボンベ、コンロ、みそとコメ、野菜、長テーブルを軽トラ3台に積んで菊野小に向かった。

午後、近くのグラウンドに大釜を置いてご飯を炊いた。10人ほどの消防団員が、ラップを手のひらに広げておにぎりを握る。前日から何も食べていない避難者が大勢いた。

ボンッー

午後3時36分、激しい音がし、空気が震えた。映画でガソリンスタンドが爆発するシーンを見たことがあるが、そのときのような音だった。

南東に楕円形の白い噴煙があがっていた。原発の方向だ。

1号機の爆発だった。

「ああ、もうだめだ」と思った。

不思議さも感じた。高い放射能が今、まき散らされているというのに、目に見えない。火事や津波のような恐怖を感じないのだ。

「まだご飯炊いている途中だから、炊き上がるまでいるべ」

そんなことを言っていると、バトカーがやってきた。スピーカーで何か叫んでいる。耳をすますと「屋内に逃げろー」と言っていた。

団員たちと体育館に入った。

3時間後、原発から20キロ圏外への避難指示が出た。今度は津島地区に避難した。14日、3号機が爆発した。15日、二本松市に移った。

4月、避難所となっている猪苗代町の温泉旅館に移った。露天風呂だった。久しぶりに落ちて着いて風呂に入った。午後10時過ぎでほかに人はいない。明るい月が出ていた。

あの月の下に見殺しにした人がいる。涙が出てきた。人目を気にする必要はない。泣いた。

手を合わせ、「すまんかった」と謝った。

浪江町の原発10キロ圏内に福島県警の捜索隊が入ったのは、津波から1カ月がたった4月14日だった。

高野が助けを求める音を聞いた一帯から、遺体が多く見つかった。

「あのとき、『助けに行こう』とずっと強く言えばよかった。朝まで捜索していれば、一人でも二人でも助けられたんだ」

10日間は生きていた

大震災から1週間後の昨年3月18日、福島市の石田賢次(45)はいらいらしていた。

父の次雄(75)と母のアイ子(72)は、原発から4キロの双葉町に二人で住む。駆けつけようにも震災翌日の早朝から原発10キロ圏内に避難指示が出ていて入れない。地震後、ずっと連絡がとれ



孫と一緒に写真に収まる石田次雄さん夫妻

ない状態が続いているのだ。

避難所10カ所近くに問い合わせてみたがいらない。地元ラジオ局で呼びかけてもらったが反応はない。

おれが助けに行くのを待っているに違いない。「人の命にかかわる」と言えば入れるのではないか。

だが、周囲からは「小さい子どもがいるのに、おまえに何かあったらどうするんだ」と止められた。

父、次雄は建具職人。シルバー人材センターで障子張りに定評があった。職人気質で無口。酒好きで酒が入ると陽気になる。

母のアイ子は近所づきあいが好き。自宅の畑でカボチャやトウモロコシをつくっており、近所の人に配ったりしていた。

翌年は金婚式だ。孫も集まって盛大にやろうと姉たちと話していた。どこかに泊まるのもいいな、と。

自衛隊に頼もう。じりじりと休日明けを待ち、22日に役場に電話した。

「うちの親を見に行ってもらえるよう、自衛隊に頼んでもらえないでしょうか」

翌23日、役場から電話があった。

「二人の遺体がありました」

自宅は津波に襲われていた。現場は津波でぬかるみ、橋が落ちてすぐには収容できないという。

4月4日夜、双葉署から「遺体を収容しました。確認して引き取っていただけますか」と電話があった。

翌5日、南相馬市の高校の体育館で、石田は姉(49)と一緒に、二つの棺と向き合った。ベニヤ板のような薄い木の棺。開けると、グレーの遗体収容袋があった。

チャックを下ろした。黒く、やつれ、変わり果てた父の姿があった。口元が乾いて、半開きで、水を飲みたそうだった。目を見開いていた。苦しそうな表情。何かをつかもうとしていたかのように、右手は少し浮いていた。

父は2階の布団の中で死んでいたと聞かされた。津波は2階まで上がっていなかった。

検案書には「衰弱死」とあった。死亡推定日は3月21日。10日間生きていたということだ。声が出なかった。姉は泣き崩れた。

助かる人、死なせた

津波の19日後、福島県相馬市の医師、標葉隆三郎(59)は南相馬署で一人の遗体と向き合っていた。

3月11日以降、犠牲者の検視をしていた。津波の死者がほとんどだったが、死因不明の遗体

もあった。

横たえられていた75歳の男性。自宅の布団の中で見つかったというのに、雨がっぱを着ていた。逃げられず、電気もガスも水道もなく、暖房もつけられずに寒かったのだろう。やせこけ、顔が真っ黒だった。

男性は双葉町の住宅の2階で見つかった。1階は津波で水浸しで妻が水死していたと説明を受けた。

両手を合わせ、目を閉じる。

警察官が服を脱がせていく。

全身が黒っぽかった。肉が落ち、骨と皮だ。腹は極端にへこみ、体はひからびていた。外傷はない。

ああ、ひどいな。

警察の話では、もともと体重は60キロあった。しかし遺体は38キロ。

部屋にはコーラと酒の空き瓶が転がっていたとも聞いた。寒く、食べ物もなく、独りで死んだ。

飢死だ。そう思った。

60キロの人が38キロになるには、10日はかかるとされている。標葉は、死亡推定日を21日、死因を衰弱死とした。男性の名は石田次雄だった。

ほかにも4体、石田と同じく原発避難区域内で見つかった60〜70代の衰弱死の遺体を検視した。富岡町の60代の女性はこたつの中でやせこけた状態で見つかった。足が不自由で、一人では逃げられなかった。

大熊町の男性(63)は駐車場でガス欠の車のそばで倒れていた。男女二人はそれぞれの自宅で見つかった。

「津波だけなら助かったのです」と標葉は言う。

「助かる人を死なせたのは、原発事故です。行政も東電も、責任を感じてほしい。1年後の今、私がこうやって話すのは鎮魂のためなんです。悼まれることなく亡くなった人たちへの鎮魂です」

現在いわき市に住む石田次雄の長男、賢次(45)は、昨年6月に実家に一時帰宅した。父が



遺体と向き合った標葉陸三郎医師

見つかった離れの2階。枕元に2・7リットルのペットボトルを見つけた。果実酒らしきものが6分の1ほど残っていた。

母は果実酒づくりが趣味だった。父が最後に命をつないでいたのは、母の果実酒だったのだろうか。

賢次は今でも悔やむ。

「原発事故がなければ、父だけでも助けられたのに」

第十一章 脱原発の攻防

小此木 潔